慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	藤田祐賢略年譜
Sub Title	YUKEN FUJITA : Resume
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.538- 544
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0538

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

藤田祐賢

略年譜

一九二三年　七月七日、東京芝区三田松阪町の宝徳寺（浄土眞宗本願寺派）の長男として誕生。姉一人（一九三五年死亡）、弟一人。

一九三六年　二・二六事件起きる。戒厳令が出て中學校の入試日時などに影響を及ぼす。三月御田尋常小学校卒業、私立芝中学校に入学。

一九四一年　三月同校卒業、この間五年間、僧侶の資格取得のプロセスとして、築地東京仏教学院にも通学したが、その佛教々育はむずかしすぎて閉口する。

一九四一年　慶応義塾大学予科文科に入学。奥野信太郎教授の漢文の講義に、それまで味わったことのない興味を感じ、また樋口勝彦教授の英詩講読にも魅力を覚える。夏、京都で得度のための修練を受けるが、いかにも戦時下らしいやり方に抵抗を感じる。十二月、太平洋戦争勃発、軍事教練にウエイトがかゝる。

一九四二年　予科二年時、肺浸潤で休学。翌年詮衡及第三年、同年九月、戦争のための特別措置で予科修了。十月本科の古典文学支那文学科に進んだが、徴兵検査で結核と診断され、丁種不合格兵役免除となり、いわゆる学徒出陣をまぬがれる。後、血痰が出てショックを受け、不安感に悩まされながら療養に専念し、快方に向う。その間B29の東京空襲を機に静養の為、茨城県下の某寺に疎開したが、終戦は東京自宅で迎え、米軍の進駐を目撃して感慨無量。

一九四六年　米軍占領後の東京は焼土と化したものの除々に復興に進み、四月には慶應義塾大学の授業も再開されることになり、すでに健康をとりもどしていたのでこれを機に学部一年に復帰し、中国より帰国されたばかりの奥野先生が

主任となられた中国文学専攻科に在籍。一九四九年の卒業時までに、先輩の伊庭洋二(故人)、同年の三松哲夫、村松暎、竹嶋清純、後学の佐藤一郎などの諸兄と教室を共にする。二年時、佐藤春夫の漢詩翻訳集に魅了され、また中学の時、『水滸伝』の訳を読んでいた関係で、中国の小説に関心を抱き、奥野先生の御指導で卒業論文には聊斎志異研究をえらび、とくにその説話のフォークロアの観点にたつ考察及び日中比較文学の面からする研究に専念した。一九四七年には松本隆信(後の斯道文庫長)君と共に、京都西本願寺で教師(住職になる為の資格)を取得。

一九四九年　四月慶応義塾大学文学部助手に就任。共に就任した友人に、倫理学の三雲夏生、社会心理学の佐野勝男の両君がいる。とくに三雲君とは、後に彼がフランス留学から帰国してしばらく宝徳寺に寄居していた関係で親しく交際する。助手になってから引続いて聊斎研究を進め、とくにその比較文学的研究とフォークロアの面からの考察に興味をもつ。また平井雅尾氏蒐集の大量の聊斎関係資料が一九五三年に中国文学研究室の所蔵になり、以来それらの整理と、その一部を資料とする調査を進め、成果を日本中国学会大会研究発表会などで発表し、また関係論文を『芸文研究』その他に発表する(詳細→後掲業績の項)。

一九五一年　林美子(一九四八～四九年聴講生)と奥野先生ご夫妻の媒酌で結婚、十二月に長男誕生。

一九五二年　慶応義塾中等部「漢文」授業嘱託(一九五四年まで)。

一九五五年　慶応義塾外国語学校「中国語」講師(一九六三年まで)。

一九五七年　北里衛生科学専門学院「文学」講師(一九六二年まで)。

一九五九年　慶応義塾大学文学部専任講師。九月より文化学院非常勤講師(一九七五年まで)。

一九六二年　北里大学衛生学部「文学」非常勤講師。

一九六八年　一月十五日成人の日、奥野先生急逝、大きなショックを受ける。四月より慶応義塾大学文学部助教授。

一九七一年　慶応義塾大学文学部教授。

一九七三年　日本中国学会評議員（一九七五年まで）。慶応義塾佛教青年会会長になり、八〇年史を完成して刊行する（一九七四年）。

一九七四年　八月、父の逝去にともない、宝徳寺第十五代住職を継ぐ。以后、佛教書、とくに親鸞関係書、富士川遊氏、増谷文雄氏の著書を読む。アメリカで神学を学んだ梶村昇氏の『南無阿彌陀佛の論理』に深い感銘を受ける。

一九七五年　日本中国学会理事（一九七七年まで）。

一九七七年　慶応義塾大学院文学研究科委員。

一九七八年　筑波大学非常勤講師（一九七九年まで）。

一九八一年　お茶の水大学非常勤講師（四月～九月）。

一九八三年　四月より明年三月までサヴァティカルを得られたので、四月はじめ、十日たらずであったが念願の中国への調査のための一人旅行に立つ。北京から済南、淄博を経て、蒲松齢の故居をおとずれ、路大荒氏の息路士湘氏にあい、資料をみせてもらう。帰途再び済南によって山東大学を訪問、蒲松齢研究家の袁世碩、馬瑞芳、関徳棟等の諸氏にあって話をし、種々ヒントを得ることができたが、資料は全く見せてもらえず、がっかりする。しかしこの度の旅行によって、中国の風土を眼でたしかめ肌で感ずることができ、深い印象を受けて、再度の旅行を念願する。

一九八四年　平井蒐集資料中の『知命集』の作者を蒲松齢とする前野直彬氏の説に最初から深い疑問を抱きつゞけてきたが、この年の早慶中国学会での講演の準備の過程で、『知命集』及び同筆蹟の『青雲集』の精査に加えて西川寧先生と

友人大柳英二君（法学部）との深い学識に基く鑑定によって、この二つの作品集が蒲松齢ではない某文人の作と認定する確証をえて、その考証を翌年夏論文にまとめあげることができて満足する。

一九八六年　一月突如メニエル氏病の猛烈な諸発作に襲われ、救急車で入院。十日たらずで退院したものの、翌一九八七年にわたる二年間は断続的に発作に悩まされ、すっかり体調をくずし、とくに讀書を阻害されて、精神的に落ち込む。十一月、最も誠意ある友人として信頼していた三雲夏生君の急逝に遭い、心から彼の死を悼むと共に、人の世のはかなさを身にしみて感じる。十二月、山東大学の袁世碩教授が来日、塾の聊斎文庫資料を三日間にわたって調査されたが、同教授のおかげで、従来いくつかの資料について抱いていた疑問も解ける。

一九八八年　一月に心配していたメニエル氏病の発作もおこらず、かなり元気をとりもどす。三月、聊斎資料の新書目を八木章好君の協同作業をえてようやく完成し、「芸文研究」に収めてもらう。四月より要請されて十三年ぶりに再び文化学院講師を兼ねる。九月末よりさいごの通信夜間スクーリングの講義を担当、その中途で声帯のひどい炎症のために発聲るいちじるしく困難をきたし、やむなく講義を断念する。以后発聲の不調がかなり長くつづく。

一九八九年　三月、満四十年間の慶應義塾大学の勤務を終了して、定年退職。

（補）文学部勤務中、「漢文」「中国語」「中国語学」「原典講讀」（老舎作品演習）「中国古典演習」（唐代伝奇小説演習）等を担当。大学院では「近世中国文学特殊研究演習」（修士課程――「聊斎志異」）「中国文学特殊講義演習」（博士課程――「聊斎文集」、「子不語」）を担当。

業　績

I　主たる口頭研究発表・講演

●蒲松齢伝補考　日本中国学会第六回大会（一九五五年）

●聊斎志異の文章構成について　中国語学研究会第五回大会（一九五五年）

●聊斎志異の一側面――とくに尾崎紅葉・芥川竜之助・太宰治との関連において――日本中国学会第十回大会（一九五八年）

●異史氏曰考　日本中国学会第十一回大会（一九五九年）

●聊斎俗曲考　日本中国学会第十三回大会（一九六一年）

●わが国に於ける聊斎志異　日本比較文学会公開講演会（一九六二年）

●文学史における清代（小説・戯曲）日本中国学会第十七回大会（一九六一年）

●中国におけるユートピア　芸文学会シンポジウム（一九八〇年）

●昔話・伝説・メルヘンの諸相（中国）　芸文学会シンポジウム（一九八五年）

II　主なる論文

●聊斎志異研究序説　「芸文研究」三

●稿本聊斎志異考勘記　「芸文研究」六

●聊斎志異の一側面――特に日本文学との関連において――　「慶応義塾創立百年記念論文集」
●論賛と随想の流れ　「芸文研究」一四・一五
●聊斎俗曲考　「芸文研究」一八
●聊斎民譚考　「芸文研究」二七
●伝蒲松齢著〝青雲集・知命集〟について「国学院雑誌」八六巻一一号

III　資料紹介・書評

●炎涼岸・女開科伝・知不足斉原本批点聊斎志異　「芸文研究」七
●聊斎志異の研究と資料　「中国の八大小説」（平凡社）
●加賀栄治著「中国古典解釈史」　「芸文研究」二〇

IV　翻訳

●パール・バック〝中国小説論〟　浅間嶺四八～五三
●「聊斎志異」（共訳）　中国古典文学全集二一・二二（平凡社）
●「十二楼」（抄訳）　世界短篇文学全集一五（集英社）

V　著書

●「明清の文芸」　玉川百科大辞典一五（玉川大学出版部）
●「聊斎志異」　中国文学名作全集九（盛光社）
●「西遊記・聊斎志異」　世界の文学六（世界文化社）
●「伝説と民話」中国篇　佛教説話大系一五（すゞき出版）
●「聊斎研究文献要覧」（八木章好共編）（東方書店）
●「妖異奇譚・風流艶笑の世界」　東洋の奇書五五（自由国民社）
●「万暦帝」　人物・中国の歴史八（集英社）
●「入門中国語会話」　旺文社カセットL・L（旺文社）
●「暮らしの日本語百科」（監修及び執筆）（三宝出版）